

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01331

研究課題名(和文)戦争の「歴史化」を考える 「戦争の消費」と戦争認識の変化

研究課題名(英文)Tinking the Historicization of War

研究代表者

佐々木 真(Sasaki, Makoto)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：70265966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：冷戦後の戦争の変化などにより、戦争の多面性が注目されるなかで、本研究は戦争や戦争体験がどのように「消費」され「変容」したかに焦点を当てた。発信者と社会集団の相互作用に焦点を当てた「戦争の消費」という概念は、戦争認識の形成と変化の理解に有効であり、それを通じて、17世紀以降の戦争認識の変化や20世紀の戦争の暴力性や残虐性の原因を考察した。

その結果「戦争の消費」という概念の有効性を確認できた。たとえば、博物館展示については、設置主体の意図や観客の反応(消費行動)の相互作用が示唆された。研究の総括は今後の課題だが、戦争認識の変化のメカニズムについて一定の見通し立てることができ、有意義な成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：「戦争の消費」という概念の有効性についての研究は、戦争研究や人文社会科学の分野において新たな視点を提供することとなる。博物館展示における設置主体の意図や観客の反応との相互関係の解明は、戦争認識の変化のメカニズムの解明の一助となり得る。

社会的意義：戦争の消費に関する研究は社会的な関心事に対応し、戦争の記憶や理解に関する議論を促進させることになる。また、研究結果の社会的な普及を通じて、一般の人々に対して戦争の消費の問題を意識させ、戦争に関する理解と記憶の促進に寄与することになる。

研究成果の概要(英文)： Amidst the attention paid to the multifaceted nature of war in the post-Cold War era, this study focused on how war and the experience of war have been "consumed" and "transformed." Focusing on the interaction between the sender and the social group, the concept of war consumption is useful for understanding the formation and change of war perceptions, and through it, the study sought to identify the changing perceptions of war since the 17th century and the causes of the violence and atrocities of war in the 20th century.

As a result, we were able to confirm the validity of the concept of "consumption of war". For example, with regard to museum exhibits, the study suggested an interaction between the intentions of the installing entities and the reactions of the audience (consumption behavior). Although a summary of the research is a subject for the future, we were able to gain a certain perspective on the mechanism of change in war perceptions, and the results were meaningful.

研究分野：ヨーロッパ史

キーワード：ヨーロッパ史 軍事史 戦争 記憶 パブリック・ヒストリー 博物館 記念碑 サブカルチャー

1. 研究開始当初の背景

クラウゼヴィッツが『戦争論』で述べた、「戦争は他をもってする政策の継続にすぎない」という言説は、戦争は政治に従属するものであるという考えを広く定着させた。そのため歴史学でも、戦争は19世紀以降の政治主体である国民国家とともに語られてきた。たとえば、国家を基礎単位とする国際関係論の対象として、あるいは近代国家形成における戦争の役割の重視(軍事革命論、財政軍事国家論)、総力戦体制における動員などの、国家が戦争遂行を可能した要因、国民統合に関心が向いており、本質的には政治史として位置づけられよう。

だが、冷戦以降の国家間戦争の危機の後退、テロリズムのような新たな「戦争」の出現に伴い、戦争の歴史の問い直しが始まりつつあり、戦争体験や性暴力、環境破壊など、戦争のありかたの多面性を描き出す研究も進展しつつある。また、一国史的な戦争叙述や欧米の戦争観の世界史への投影を反省し、グローバルな戦争の歴史を描くべきだとの指摘もなされている。つまり、戦争は国家政治や国際関係に限定されない、社会総体の出来事、また文化的な行為であり、現在の歴史学では、広い視野から戦争を研究し、新たな戦争の語り、すなわち新たな戦争の「歴史化」をする必要があるとの認識が、本研究の背景にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、17世紀以降のヨーロッパを中心とした地域で、戦争あるいは戦争体験がいかに「消費」され「変容」したのかを具体的に明らかにすることである。

この目的の達成のため、本研究では、「戦争の消費」という分析視角を設定する。近接する概念である戦争の「受容」や「記憶」、「プロパガンダ」が行為主体に重点を置くのに対して、「消費」の場合には、発信者と社会集団との相互作用のなかで、戦争認識がどのように形成・変化したのかに注目する。たとえば、19世紀末にヨーロッパ各地で、円環状の壁面全体に大型絵画を展示する「パノラマ館」が活況を呈した。そこで鑑賞された絵画の多くが戦争画であり、死体も含め、戦闘の場面がリアルに描かれていた。まさに娯楽施設である「パノラマ館」で戦争が消費されるわけであり、そこでは観客の「期待」を考慮した発信者と観客との相互関係のなかで変容した戦争が現出する。その変容した戦争の概念やイメージが流布し、それが新たな現実の戦争を作り出していくのである。

すなわち、戦争認識の変化にかんして、近代の消費社会の成立とそこでの「戦争の消費」が大きな影響を与えたのではないかと仮説より、「戦争の消費」を研究することで、「歴史のなかで戦争がいかに作り出されたのか」を解明する。17世紀以降の歴史で、戦争の認識がいかに変化し、いかなる変化が原因となって20世紀の戦争の暴力性や残虐性がもたらされたのかに迫るのが、本研究の究極的な目的である。

3. 研究の方法

本研究では、以下の3つの柱を設定して研究を実施した。なお、補助金の繰越処理を実施したため、補助金交付年度ごとにまとめると情報が錯綜するので、以下では単に活動を実施した年(年度ではない)ごとに概要をまとめた。

(1) 研究の発信と外部研究者との意見交換

研究を外部の研究者に開き、積極的に意見を募ることにより、研究の方向性の検証や具体的な知見の提供を得た。おもな活動は以下のとおり。

(a) 2019年

5月19日に、第69回日本西洋史学会において小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題」を主催し、研究メンバーの5人が報告とコメントを行ない、本研究の方向性を提示し、当日の出席者から意見を募った。同年5月27日には、ブルーノ・カバンヌ(オハイオ州立大学)による日仏会館での講演「Sorties de guerre et retours des combattants au Vingtième siècle (20世紀における「戦争の出口」と兵士の帰還)」を主催した。また、本公演に先立ち、カバンヌが研究対象とするペリリュー島の戦いについて、日本史の研究者との意見交換会を行った。6月23日には、ベンヤミン・ツィーマン(シェフィールド大学)による駒澤大学での講演、「Reflections on Violence in War: German Atrocities at the beginning of the First World War (戦時暴力を考える 第一次世界大戦初期におけるドイツ軍の虐殺)」を主催し、意見交換を行った。

(b) 2020年

11月5日に日仏会館・フランス国立日本研究所と共催でシンポジウム「戦争博物館から戦時の社会の博物館へ、国際比較によるアプローチ」をオンラインで開催した。報告者は研究協力者のアネット・ベッケール(パリ西大学)で、分担者の原田敬一と兼清順子がディスカッサントとして参加、剣持久木が司会を務めた。

(d) 2022年

『軍事史学』第57巻第3号(2022年3月)の特集企画「戦争博物館と戦争記憶のあり方」に参画し、2020年に行ったシンポジウム「戦争博物館から戦時の社会の博物館へ、国際比較によ

るアプローチ」を活字化するとともに、テロリズムによる犠牲者追悼記念博物館構想委員会委員長をフランス大統領より委嘱されたアンリ・ルソー（CNRS 教授）に研究協力者の臺丸兼がインタビューを行い、その内容を『軍事史学』の同じ号に、「テロリズム犠牲者の博物館を構想する アンリ・ルソー教授との対話」として掲載した。

(2) 博物館や戦争遺跡の視察

新型コロナウイルスの感染拡大とそれによる行動制限のために、海外調査や海外の施設の視察、海外研究者との共同の調査が予定通りに実施できなかった。そのため、感染状況を見極めつつ、できる範囲で国内中心の調査を実施した。おもな活動は以下のとおりである。

(a) 2019 年

11 月 23 日に大刀洗平和記念館（福岡県）を調査した。

(b) 2020 年

2 月 24 日には、浜松で第 2 回研究集会を開催した際に、「航空自衛隊浜松広報館 エアパーク」を視察するとともに、翌日静岡県内の戦争遺跡（渋川凱旋記念門、曹洞宗東谷山常昌院、静岡陸軍墓地）を視察した。

(c) 2021 年

10 月 31 日から 11 月 4 日にかけて沖縄の視察を実施し（沖縄県埋蔵文化センター、首里城地下壕、南風原文化センター、ひめゆり平和祈念館、沖縄県平和祈念館。海軍地下壕、ガマなど）、学芸員と意見交換をした。

(d) 2022 年

1 月 6 日に、山口県周南市の回天記念館を視察。3 月 1 日から 3 日の長野県出張では、松代大本営跡の保存に携わった大日方悦夫との意見交換、安茂里村の大本営海軍壕跡の保存活動を実施する「昭和の安茂里を語り継ぐ会」との意見交換、上田市の無言館（戦没画学生慰霊美術館）の館主窪島誠一郎との意見交換などを行った。8 月 31 日から 9 月 3 日に北海道内の博物館の視察を実施し、国立アイヌ民族博物館（学芸員と意見交換）札幌護国神社、北海道博物館、札幌開拓の村、旭川護国神社、北鎮記念館（館長と意見交換）、第 7 師団関連遺構（旧旭川偕行社、旧第七師団騎兵第七連隊覆馬場など）、旭川市博物館、旭川兵村記念館などを訪問した。

e) 2023 年

2023 年 1 月にベトナムを訪問した。視察先は、ハノイ（ベトナム軍事歴史博物館、ベトナム国立歴史博物館、ホアロー刑務所、タンロン城跡、防空・空軍博物館、ホーチミン廟周辺の戦勝記念空間）およびディエンビエンフー（A1 の丘、ディエンビエンフー歴史的戦勝博物館、ド・カストリーの司令部跡、勝利の記念像）であった。2 月には、香川県善通寺市（乃木資料館など、旧第 11 師団関連施設）、広島県広島市（広島平和記念資料館）、広島県竹原市（大久野島毒ガス資料館）を訪問した。

(3) 個人研究の実施

上記と並行して各人が分担されたテーマにしたがって研究を実施した。具体的には以下のテーマを設定した。

個人や社会集団と戦争：前近代の貴族や武士、近代の軍人のように、戦争行為はある集団のアイデンティティを規定する。そこで、個人や家系、地域にとっての戦争の意味づけを取り上げ、戦争認識が変化する事例を考察した。

芸術作品・娯楽と戦争：絵画や版画、彫刻といった芸術作品、文学作品、映画などの娯楽作品はまさに「戦争の消費」の場である。娯楽施設における観客の要求、18 世紀以降の芸術作品市場の成立を考慮し、近代における「消費」の場での戦争認識の変化を考察した。

博物館・記念碑・教育と戦争：社会教育あるいはプロパガンダの場でも、発信者の期待通りに戦争認識が形成できたわけではない。博物館展示のあり方とその変化、記念碑が設置・改修される時の議論、教育プログラムの構築など、さまざまな次元で「戦争の消費」を検討した。

周縁における戦争：イギリスがインドで残虐なダムダム弾を使用したことや、フランスのアルジェリアでの戦争経験など、周縁では中心と異なる戦争の理解と実践がなされ、それが中心に反映した。海外植民地を中心に「消費」の問題を検討した。

4. 研究成果

新型コロナウイルスの感染拡大による制限のため、海外での調査・史料収集や国内での活動（特に 2020 年）が制限され、研究の総括そのものは今後の課題となっているが、研究活動を通じて「戦争の消費」という概念の有効性については、ある程度確認することができた。

たとえば、博物館においては、設置主体が戦争をどのように認識するのかが展示内容に変化が認められる。たとえば、ベトナムの場合には、博物館展示は社会主義体制下でのオフィシャル・ヒストリーと関連しており、博物館展示によりアメリカへの勝利を打ち出すことで、国民アイデンティティの形成・強化が目指され、それが国民の戦争理解にも反映していた。日本の場合は、ほとんどの場合が戦争の惨禍が展示されているが、それでも生き残った回天関係者により結成された「回天顕彰会」が設置主体となった回天記念館は搭乗員や回天そのものに焦点を当てているといったニュアンスの違いはある。また、大久野島毒ガス資料館のように、地域における「戦争」被害（毒ガス製造に従事した者たちの被害と後遺症）に焦点を当てたものもある。

展示替えも「戦争の消費」と関連する事象であった。ひめゆり平和祈念館（沖縄県）と広島平和記念館で展示替えについて学芸員と意見交換をする機会を得た。展示替えでは、それまでの入

館者の反応(消費行動)が無視できない要素であった。もちろん、研究の進展や新たな展示技術の開発といった側面もあり、さらには入館者の意見がすべて新たな展示に反映されるわけではないが、展示替えは「戦争の消費」を考える重要な機会であった。

設置者の意図に反して展示内容が解釈・評価される例も存在した。無言館は絵画コレクターであった館主の窪島が自身の戦没画学生の作品コレクションを展示するために開館したものであるが、収集のきっかけは戦争ではなく、夭折した画家への興味であった(それ以前に窪島は、まず村山槐多や関根正二といった画家の作品の収集を行っている)。窪島がこだわったのは、画学生たちの「絵を描く本能」、「描きたいものを自由に描く喜びを伝える」ことで、館には反戦のメッセージを出すことはせず、手紙や遺品の展示にも消極的であった。だが、訪問者が増えるにしたがい、館は戦争の惨禍を振り返り、画学生たちの無念に涙する「戦争祈念館」として世間からは受容され、「戦争を観る」場所となった。そのため、現在では手紙や遺品も展示されている。これは、「消費」により館のありかたが変化していった好例である。

最後に、調査で我々自身が「戦争の消費」の現場に遭遇した例もあった。2022年3月に長野市安茂里地区にある大本営海軍壕跡の保存活動をしている「昭和の安茂里を語り継ぐ会」と意見交換をした際、その場に地元のマスコミが同席し、本研究の活動がローカル・テレビ・ニュース2局と全国紙地方版および地方紙の2紙で紹介された。語り継ぐ会は海軍壕の(彼らにとっての)歴史的意義を発信するために意見交換会を設定したわけであり、そこでのやりとりがニュースで「消費」されたことは、本研究の問題設定の意義を認識する機会となった。

個人研究についても有意な結果を得られる見通しが立っている。研究の最終目標である戦争認識の変化のメカニズムが完全に解明できたわけではなかったが、ある程度の見通しを得たことや、「戦争の消費」の問題が記憶論につながる可能性を得られたことなど、有意義な成果を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計39件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 佐々木真	4. 巻 第35号
2. 論文標題 戦争の歴史を考える ヨーロッパ近世・近代を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史学協会年報	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐々木真	4. 巻 58号
2. 論文標題 近世国家の統治システムと軍事	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻本諭	4. 巻 56 (2)
2. 論文標題 イギリス陸軍軍人の軍隊経験とキャリア形成 特進将校ジョン・シップ（一七八五～一八三四年）を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西山曉義	4. 巻 22
2. 論文標題 史料紹介：占領地からのラブレター ベルギー人少女からドイツ人兵士への手紙(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quadrante（東京外国語大学海外事情研究所紀要）	6. 最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 37
2. 論文標題 解題 ベンヤミン・ツィーマン教授の論稿によせて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共立国際研究	6. 最初と最後の頁 52-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口眞子	4. 巻 NO.8
2. 論文標題 西周の新徴兵制構想 「兵賦論」の分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 135-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 谷口眞子	4. 巻 第66輯
2. 論文標題 880年における西周の国際情勢認識 「上隣邦兵備略表」の分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 883-900
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木直志	4. 巻 58号
2. 論文標題 常備軍時代のドイツにおけるポリツァイと軍隊	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木直志	4. 巻 56 (2)
2. 論文標題 革命という内戦、革命という暴力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 68号
2. 論文標題 公共史のための弁明：岡本充弘氏の書評に答えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斉藤恵太	4. 巻 10号
2. 論文標題 近世イタリアの君主国と三十年戦争 マントヴァ継承問題にみる国のかたちの諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界史研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸島宏太	4. 巻 10号
2. 論文標題 作家ルイ・シュナイダーLouis Schneiderと軍事雑誌『兵士の友Soldatenfreund』 社会の軍事化の原風景か？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界史研究論叢	6. 最初と最後の頁 20-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西願広望	4. 巻 第35号
2. 論文標題 フランス革命期におけるエシャセリオの植民地論 民族自立・自由貿易・持続的平和	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日仏歴史学会会報	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西願広望	4. 巻 56 (2)
2. 論文標題 フランス7月王政期のアルジェリア植民地戦争をめぐる言説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 27-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kobo Seigan	4. 巻 19
2. 論文標題 Le colonialisme des republicains sous le Directoire ? Le cas d' Eschasseriaux	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pierre Serna et Kobo Seigan (dir.), La Revolution francaise	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木真	4. 巻 831号
2. 論文標題 書評、仲松優子『アンシアン・レジーム期フランスの権力秩序 蜂起をめぐる地域社会と王権 』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木真	4. 巻 840号
2. 論文標題 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエ』 フランス革命研究の転換点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木真	4. 巻 第15号
2. 論文標題 コメント 前近代社会における武人と軍事	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 145-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸島宏太	4. 巻 第102号
2. 論文標題 研究会報告要旨「19世紀ドイツの兵士の世界 規律化と国民化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『近現代史研究会会報』	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 227号
2. 論文標題 フランス人と第一次世界大戦	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Equipe de Cinema	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 no.393
2. 論文標題 フランスにとっての第一次世界大戦	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 友 Iwamami Hall	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 268号
2. 論文標題 書評 橋本伸也編『紛争化させられる過去 アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 118-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 54号
2. 論文標題 公共史のすすめ 書物・映像・博物館を巡って	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 55巻4号
2. 論文標題 解題 ブルーノ・カバヌ「われら帰還者?20世期における「戦争の出口」と兵士たちの帰還」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 97-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木直志	4. 巻 841号
2. 論文標題 戦争・軍事博物館の類型学 - ヨーロッパ諸国と日本に見る「戦争の歴史化」の現在	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 白門	6. 最初と最後の頁 58-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 8-2
2. 論文標題 School Politics in the Borderlands and Colonies of Imperial Germany: A Japanese Colonial Perspective, ca. 1900-1925	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cross-Currents: East Asian History and Culture Review	6. 最初と最後の頁 488-517
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 26
2. 論文標題 外国史教育における複眼的史料集の可能性 : ドイツの歴史教育と近現代史の例から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 22
2. 論文標題 史料紹介: 占領地からのラブレター ベルギー人少女からドイツ人兵士への手紙(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quadrante (東京外国語大学海外事情研究所紀要)	6. 最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 1
2. 論文標題 ドイツ特有の道	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 234-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 1
2. 論文標題 コレットとカトリン?ドイツ領ロレーヌの二人の少女	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平野千果子編『新しく学ぶフランス史』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 165-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山暁義	4. 巻 37
2. 論文標題 解題 ベンヤミン・ツィーマン教授の論稿によせて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共立国際研究	6. 最初と最後の頁 52-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Tsujimoto	4. 巻 22号
2. 論文標題 Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子、辻本諭	4. 巻 68巻2号
2. 論文標題 満蒙開拓団の体験を学校教育でどう教えるか 日本近代海外移民史の学習を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	6. 最初と最後の頁 29 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 斉藤恵太	4. 巻 第15号
2. 論文標題 近世ヨーロッパの軍隊と貴族の紐帯 17世紀の神聖ローマ帝国と傭兵隊長ガラツソを例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口眞子	4. 巻 1
2. 論文標題 近世身分制社会における忠と孝 近世武士像創出の一面	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Dariusz Gluch, Patrycja Duc-Harada, Senri Sonoyama eds, Japanese Civilization: Tokens and Manifestations, Krakow:KSIEGARNIA AKADEMICKA	6. 最初と最後の頁 263-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口眞子	4. 巻 第65輯
2. 論文標題 思想史と軍事史の架橋 西周「兵家徳行」をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 743-754
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口眞子	4. 巻 第23号
2. 論文標題 論説 ジュール・ブリユネの箱館戦争負担処分について 新政府の「万国公法」認識の一端	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法史学研究会会報	6. 最初と最後の頁 24-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼清順子	4. 巻 21号
2. 論文標題 子どもたちに負の遺産を伝える展示 「ダニエルの物語」と「アンネxアマ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館平和研究	6. 最初と最後の頁 135-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本彰	4. 巻 12号
2. 論文標題 ドイツ現代史における建築、記念碑、都市(特集 建築から都市を語る)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 88-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 辻本諭
2. 発表標題 財政軍事国家において軍隊はいかに保持されたか イギリス陸軍の宿営をめぐる問題、1660~c.1740年
3. 学会等名 第70回日本西洋史学会大会小シンポジウム「財政軍事国家論を再考する」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木直志
2. 発表標題 近世常備軍における兵士の駐屯生活
3. 学会等名 比較国制史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丸島宏人
2. 発表標題 作家ルイ・シュナイダーと雑誌『兵士の友』
3. 学会等名 2020年度日本クラウゼヴィッツ学会研究報告大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Junko Kanekiyo
2. 発表標題 Communicating History through Exhibitions
3. 学会等名 9th International Biennial Conference of Museum Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兼清順子
2. 発表標題 合同点から作り出した博物館の展示交流モデル：京都・大学ミュージアム連携の10年を振り返って
3. 学会等名 京都・大学ミュージアム連携シンポジウム「コロナ時代の連携 京都・大学ミュージアム連携の10年とその後」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 書評会 仲松優子『アンシアン・レジーム期フランスの権力秩序 蜂起をめぐる地域社会と王権』（有志舎・2017年）
3. 学会等名 西洋近現代史研究会2019年4月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 シンポジウム「世界史の中の武人 越境と帝国秩序 」コメント
3. 学会等名 メトロポリタン史学会第15回大会シンポジウム「世界史の中の武人 越境と帝国秩序」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 ヨーロッパの戦争・軍事博物館の動向
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 戦争の「歴史」を考える ヨーロッパ近世・近代を中心に
3. 学会等名 2019年度日本歴史学協会総会公開講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 「主権国家再考」の議論について
3. 学会等名 科学研究費補助金基板(A)「歴史的ヨーロッパにおける主権概念の批判的再構築」公開研究会『「主権国家再考」の再考』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 近世国家の統治システムと軍事：シンポジウム「近世ヨーロッパにおける国家の統治構造と軍事
3. 学会等名 九州西洋史学会2019年度秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木真
2. 発表標題 概説書としての『フランス革命「共和国の誕生」』
3. 学会等名 フランス革命研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 「大使館付き在外武官（陸軍、海軍）についての中間的まとめ」
3. 学会等名 科学研究費補助金基盤研究(A)「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」研究集会（代表：谷口真子）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 公共史のすすめ 書物・映像・博物館を巡って
3. 学会等名 東海大学史学会2019年度大会公開講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 フランス人にとっての第一次世界大戦
3. 学会等名 エキブドシネマ映画ミニ講座
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 映画の中の第一次世界大戦
3. 学会等名 『田園の守り人たち』公開記念セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木直志
2. 発表標題 戦争・軍事博物館の類型学
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木直志
2. 発表標題 常備軍時代のドイツにおけるポリツァイと軍隊
3. 学会等名 九州西洋史学会2019年度秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西山暁義
2. 発表標題 戦争展示の「歴史化」？ 第一次世界大戦を例に
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 斉藤恵太
2. 発表標題 近世ヨーロッパの軍隊と貴族の紐帯 17世紀の神聖ローマ皇帝軍を中心に
3. 学会等名 メトロポリタン史学会第15回大会シンポジウム「世界史の中の武人 越境と帝国秩序」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田敬一
2. 発表標題 日本史からのコメント
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本彰
2. 発表標題 ランゲマルク神話の「歴史化」：1914-2015
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムIX「戦争を「歴史化」する 戦争・軍事博物館の現状と課題 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兼清順子
2. 発表標題 Communicating History through Exhibitions: The Kyoto Museum for World Peace undertakes the challenge of opening discussions between Japanese students and their peers from former colonial territories
3. 学会等名 第25回ICOM(国際博物館会議)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西願広望
2. 発表標題 Les colonies pour la Revolution cosmopolite- Le cas d'Eschasseriaux
3. 学会等名 Colloque international - Cosmopolitismes et patriotismes au temps des Revolutions, Commission internationale d'histoire de la Revolution francaise (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 西山曉義	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 257
3. 書名 The Franco-German Relations Seen from Abroad: Post-war Reconciliation in International Perspectives (Frontiers in International Relations)	

1. 著者名 西山暁義	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 456
3. 書名 右翼ポピュリズムに抗する市民性教育：ドイツの政治教育に学ぶ	

1. 著者名 西山暁義・鈴木直志・斉藤恵太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 金澤周作監修『論点・西洋史学』	

1. 著者名 剣持久木（翻訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 317
3. 書名 アンリ・ルソー『過去と向き合う：現代の記憶についての試論』	

1. 著者名 西山暁義・丸畠宏人・松本彰	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 石田勇治他編『ドイツ文化事典』	

1. 著者名 兼清順子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 503
3. 書名 蘭信三、小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか』	

1. 著者名 松本彰	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 石田勇治/川喜田敦子/平松英人/辻英史編『ドイツ市民社会の史的展開』	

1. 著者名 Keita Saito	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Vandenhoeck & Ruprecht	5. 総ページ数 346
3. 書名 Das Kriegskommissariat der bayerisch-ligistischen Armee waehrend des Dreissigiaehrigen Krieges (Herrschaft und soziale Systeme in der Fruehen Neuzeit 24)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丸畠 宏太 (Maruhata Hiroto) (20202335)	敬和学園大学・人文学部・教授 (33104)	
研究分担者	斉藤 恵太 (Saito Keita) (20759196)	京都教育大学・教育学部・准教授 (14302)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻本 諭 (Tsujiimoto Satoshi) (50706934)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	
研究分担者	剣持 久木 (Kemmochi Hisaki) (60288503)	静岡県立大学・国際関係学部・教授 (23803)	
研究分担者	原田 敬一 (Harada Keichi) (70238179)	佛教大学・歴史学部・名誉教授 (34314)	
研究分担者	谷口 眞子 (Taniguchi Shinko) (70581833)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	西山 暁義 (Nishiyama Akiyoshi) (80348606)	共立女子大学・国際学部・教授 (32608)	
研究分担者	鈴木 直志 (Suzuki Tadashi) (90301613)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	大村 順子（兼清順子） (Kanekiyo Junko) (90773987)	立命館大学・国際平和ミュージアムオフィス・職員 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------